

翻訳

ラガーディア委員会報告書： ニューヨーク市における大麻問題

ラガーディア委員会 著
山本 奈生 訳

1. 訳者解説：報告書の位置づけと意義

本稿は1944年に公開された『ラガーディア委員会報告書：ニューヨーク市における大麻問題』(The LaGuardia Committee Report: The Marihuana Problem in the City of New York; 以下『ラガーディア報告書』とする)における「社会学的調査」部分の翻訳である。本報告書はフィオレロ・ヘンリー・ラガーディア市長が大麻問題に関する諮問委員会として招集した専門家組織によって書かれたものである。委員会の初会合は39年に実施され、41年までの2年間に調査研究が行われ44年に公開された。

ラガーディア報告書は21世紀現下に生じている、北米地域やEU圏、中南米などの大麻に関する非犯罪化／合法化政策を半世紀以上前から示した薬物政策の重要な公文書である。この報告書は、往時巷間で言っていたマリファナの影響は「誇大に評価されている」と結論づけ、依存性は少なく他の麻薬類と比較すれば小さな悪影響しかないとするものであった。

1937年には全米において「マリファナ税法」が成立し、戦後的なドラッグ戦争の導火線が形成された。これは社会学的にみれば、30年代中頃からポピュリズム手法を駆使した麻薬局長官のJ.アンスリンガーが、メディアキャンペーンを通じて引き起こした「モラルパニック」の事例である。往時では一般的に大麻は広まっておらず、部分的認識しか存在しなかつたため、マリファナはコカインや阿片よりも重大な「殺人草」だとする当局の宣伝は功を奏した。そしてこの宣伝は、「メキシコ人と黒人」に対するレイシズムを不可分の前提として行われた。

これに対して、25年の『パナマ運河地域での大麻問題報告書』や、全米医師会は大麻が「すぐ狂気に至る」「狂気は自殺や殺人を起こす」などといった悪影響は誇大に宣伝されているとの、慎重な見解をもっていたが、それが最も体系的に表明されたのが『ラガーディア報告書』であった。もちろんアンスリンガー長官は、報告書草案に対して激怒して差し止めを求めたため、調査終了から報告書公開までの期間が若干引き延ばされた。

ラガーディア市長は、現在ニューヨーク市北部にある「ラガーディア空港」に名を遺しており、市長在任期間は 34 年から 46 年である。彼は下院議員の時代から共和党より出馬をしたが、党の綱領からは距離を取った「共和党内のリベラル派・改革派」として評される。F. ローズヴェルトのニューディール政策を市長として実行したほか、30 年代の市内に蔓延していた「地域ボスと集票マシーンの政治」「マフィアと政治の結びつき」を打破し、汚職追放運動を行った。一方で彼は市政改革運動を「上から」行ったため、後に「草の根の市民運動」からはやや冷ややかな評価もなされてきた。いずれにせよ、彼が市長として大きな影響力を発揮したことは間違いない。

30 年代後半以降、麻薬局のアンスリンガー長官はギャンブルおよびマフィアとの関連で、大麻問題をさらに苛烈に追求しようと試みていた。ラガーディア市長もまた、マフィア追放には賛同していた改革運動の旗手であったが、一方で彼は実利的な政治家でもあり、ギャンブルを一部公営化して競馬や合法スロットマシーンからの収税を得ようともしていた。

1938 年 9 月、アンスリンガー長官が指摘するような「マリファナの壊滅的な悪影響」が、実証的には如何なるものであるのか、ニューヨーク市内での影響を調査するための諮問委員会組織がニューヨーク医科大学アカデミーに依頼された。座長 G. B. ウォレス博士のもとで本調査は二つのパートに分かれて実施された。一つ目は本訳にある「社会学的研究」であり、二つ目は「臨床学的研究」である。

「社会学的研究」の担当リーダーは D. D. シェーンフェルドであり、複数の専門家とニューヨーク市警の協力を得て報告書執筆がなされた。このパートは、報告書全体の約三分の一を占めており、後半の「臨床学的研究」では、長大な薬理学、診療記録などの医学的調査が掲載されている。本稿は報告書全体の「序文」および「臨床学的研究」を除いた、「社会学的研究」パートの翻訳である。

当該報告書の意義は次の点にある。第一に、これは『アウトサイダーズ』の前史を構成する公文書である。H. S. ベッカーの『アウトサイダーズ』は、現代社会学にとっての古典として知られており、その主たる評価は「ジャズクラブの、黒人アーティスト」らの生き生きとした生活世界の描写と、大麻喫煙が逸脱として構築されていく社会構造の分析にある。本報告書は狭義の社会学研究者によってなされたものではないが、40 年代において可能であった社会学的フィールドワークの手法を用いて、ハーレム地区における大麻使用の概貌を興味深く描いている。

第二に、本報告書は戦後、特に 60 年代後半以降の若者と大麻問題、大麻合法化運動の重要な参考項とされてきた。古くはビートニクから NORML 等の専門家集団に至る、少なくとも末端所持者に対して懲役刑を科すのを止めよとする社会運動は「ラガーディア報告書」を頻繁に参照してきた。

本邦においても、報告書の存在は大麻問題に関心を持つ人々の間で知られているものの邦訳

はないため、まずは「社会学的研究」を訳出することとした。原文に注釈はなく、翻訳に付された註は全て訳注である。また文中での括弧や文献引用法は原文そのままに記載した。

社会学的研究

D. D. シェーンフェルド⁽¹⁾

イントロダクション

大麻に関する市長の諮問委員会によって実施された、本調査パートを十全に理解するためには、このドラッグの広まりと使用に関する歴史をまず概観しておくことが、大変重要である。

マリファナ（アメリカではハシッシュの同義語）の元となるインド大麻草は、人類史としては三千以上前から知られている⁽²⁾。この植物は、元来中央アジアを原産とするものであるが、今日では世界中の至るところにみられ、野草としても栽培されたものも、違法である場合も合法である場合もある。

元来知られていたことは、当該植物は商品作物として繊維が取り出され、紐や繩、織物として用いられてきたということである。その後間もなく、大麻の医薬品としての性質は外科的な医療目的で利用されるようになった。文献史としてみると、中国人が2000年ほど前から大麻を外科治療の際に有効であると示した根拠がある。概ね10世紀になる前には、アフリカやアジアの人々は大麻の酩酊効果をより無差別に使用しはじめてきた。

こうした用途が広まった直後、大麻はアジアやアフリカでの統治者のみならず、医療、宗教、社会問題に关心をもつ複数の人々から関心を寄せられた。これらごく初期的な大麻の調査者らの中には、ハシッシュ喫煙が身体的、精神的な不調をもたらすと主張するものもいた。別の報告者は大麻の効用に注目し、これは意義ある人生にとって不可欠のものであるとして、喫煙を推奨するものもあった。

この先駆的時期において、ヨーロッパの人々はアフリカやアジアでのハシッシュ喫煙に気づきはじめ、これらの大陸における一つの悪習慣であると認識していた。19世紀西欧における大麻への関心は急速に増加するのだが、これはハシッシュ喫煙に関するロマン主義者らの創作的報告によるものである。これらの著名で影響力を持つロマン主義者らはハシッシュ喫煙に惹き込まれ、そこで得られた経験を主観的に表現する方法でもって描いた⁽³⁾。空想的文学の調査研究では、彼らの書いた多数の著作にハシッシュ経験が含まれていることが明らかにされている。文学者らの議論は要するに、ハシッシュ喫煙は精神病的な経験や死、そして長期使用を行えば身体と精神に不調をもたらすというものであった。ロマン主義者らの玄妙な報告は西欧世界に広ま

り、彼らのハシシに関するモノグラフを受け入れさせたため、ハシシ喫煙は西欧では流行しなかった。しかし近年では、広範なヨーロッパ人がマリファナあるいはハシシ喫煙を行つており、それはアメリカでの悪徳として見做されているものである。大麻喫煙の習慣はヨーロッパでもすぐさま知られることとなったが、今日ヨーロッパでも知られるようになったのは、アフリカやアジアから大麻が流入したためではなく、アメリカから直接ヨーロッパへと伝播したことによる。

アメリカにおいて、インド大麻草は17世紀初期には商品作物としてニューイングランドの植民地で栽培されていた。現在では野草であれ作物であれ、合法、違法のどちらであっても全米の至るところに植生している。合法的な栽培が行われているのは、ケンタッキー州、イリノイ州、ミネソタ州そしてウィスコンシン州においてである。これら合法的栽培は一万エーカー以上の土地において行われていると推定してよい。大麻は紐や縄、織物とするために商品的価値を有する。種は鳥のエサとされたり、種からオイルを抽出してしばしば画家が絵の具に亜麻仁油の代わりとして混ぜたりすることもある。この草から抽出されたヤニは、医薬品を製造する際にも用いられる。

遡れば17世紀から大麻栽培が行われてきたのに、マリファナ喫煙が約20年前までは全く全米で問題とされてこなかったことは大変興味深いが、その理由を説明することは困難である。そして、喫煙はこの10年間に行われた非常に大規模な宣伝によって深刻な問題とみなされてきた。

「マリファナ」という語の起源は明確ではない。その分野の権威によると、ポルトガル語で毒を意味する「マリガノ」によるとするものや、あるいはメキシコにおける「メリージェン」という言葉に由来があるとされる。米国でマリファナ喫煙の習慣がどのようにして紹介されたのかは、色々な憶測がある。最も穏当な仮説はメキシコ人の流入によって喫煙が知られこととなったとするものである。

昔からメキシコではマリファナ喫煙の習慣があり、そのためメキシコ人労働者が南西部の国境を越えて、彼らの習慣を伝播させたと仮定することは一定の論理性がある。彼らは自らの土地からマリファナを持参し、そのまま自然と新たな地においても喫煙を行い自らのために栽培した。登場するやいなや、これは米国国民にも用いられた。現下では全米にマリファナ喫煙が広まっている。

マリファナ喫煙は有害でありうると広く信じられており、喫煙に広がりに伴って連邦政府や市政府、有識者、あるいはアヘン諮問委員会や、国際麻薬教育協会などが調査を行ってきた。これら団体組織による調査から大麻喫煙に関する多くの情報とデータを得ることができる。論点が錯綜している部分を除いて要約すれば、多数機関の一般的声明はマリファナ喫煙には有害性があるとするものであるが、一部のものは無害であるとしている。大多数が信じるところでは、マリファナ喫煙は少年少女の間で広まっているということである。益々増加する大麻への

需要を満たすために販売網が組織され、喫煙を推奨しているとされ、少年非行の多くが直接大麻の影響と結びつけられている。ここで大麻喫煙は主たる犯罪と性的犯罪の原因の大部分を占め、長期の喫煙習慣は身体的・精神的な不調をもたらすとされる。

この習慣がもたらす災厄についてのこれら公式的、準公式的な見解は、我が国において広く新聞や雑誌において宣伝されてきた。ここで公式的見解の一つを引用してみることは、本報告書にとって有益だろう。「マリファナ、インド大麻草について知るべきこと」と題する、国際麻薬教育協会によるパンフレットを一つ見てみよう。

「マリファナは最も強力・強烈な興奮剤です。このドラッグの精神作用は中枢神経系に対して独特の精神高揚と錯乱をもたらします。高揚と混乱は他の薬物依存者よりも強くみられ、一般的にはその後抑うつ状態となります。使用者はしばしば意識混濁状態となり、諸個人のパーソナリティや精神状態に応じて鮮烈かつ奔放な夢をみます。こうした状態は使用者個人にとってはまだ幸福ですが、別の場合には警告として現れます。差し迫った死やわけのわからない危険への恐怖が現れるのです。後者の夢の場合に使用者は完全な無意識状態となっており、しばしば急性躁病やけいれん発作へと発展します。

マリファナに含まれる麻薬成分は心拍数を低下させ、不整脈を生じさせます。心臓への負担から死に至ることもあります。マリファナの長期的な使用は多くの場合に狂乱へ至り、暴行や殺人といった凶悪犯罪へと使用者を導きます。このことからマリファナは『殺人ドラッグ』と呼ばれているのです。習慣的な喫煙はほぼ必ず精神的不調をもたらし、時には発狂に至ります。これによりマリファナはよく『ロコワイード』と呼ばれています（ロコはスペイン語で狂気を意味します）。

喫煙習慣は身体的なダメージと精神薄弱をもたらしますが、これが性格や道徳性に対して与える影響はまさに災厄というべきです。この薬物の被害者は、良心の呵責なしに嘘をつき盗みを行うという退廃状態となり、使用者は誰も信じることができなくなり、そしてしばしば共に墮落した仲間らと裏社会へと入っていって、そこであらゆる犯罪を行うのです。マリファナはしばしば動機や理由なき殺害衝動をもたらします。多くの暴行、レイプ、強盗、殺人はマリファナと関連しています。」

(1) International Narcotic Education Association. "Marihuana or Indian Hemp and Its Preparations." Los Angeles, 1936.

次にあげるのはニューヨーク・デイリーワーカー紙に掲載された1940年11月28日（土）のコラム記事「ヘルス・アドバイス」である。

ドラッグと狂気

「ビル・ウィルソンはソーダを片手に高校からの家路にあって、何処からか親しく呼びかける囁き声をはっきりと聞いた。『おいビル、ちょっとこいよ』。ガススタンド看板の裏に親友ジムの姿があった。ジムは少し興奮気味に『クサを手に入れたんだ！』と言った。『クサ？なんだそれ』。

ジムはポケットに手を突っ込み、勿体ぶりながら二本の大きな煙草をみせた。『マリファナか！』とビルは気づいた。『今からひとつクラブにいって吸おうじゃないか、楽しいぞ！』。ビルは毎年新たにマリファナ喫煙を行おうとする、無数の高校生らの一人に過ぎない。』

「これは一体何か。この植物には阿片と同等の麻薬成分が含まれており、野草でもある。そのためこのドラッグを統制することはとても難しく、容易に入手可能である。マリファナ喫煙は依存を形成する。意志を破壊し抑制をなくさせて狂気へと向かわせる。継続的な使用により目が血走って手足に震えがくる。そして狂気に落ち込んでいく。強盗、快楽殺人、性犯罪などの凶悪犯罪が行きつく先だ。習慣が始まった時はまだ症状は穏やかだが、十分に強力である。喫煙者は時間と空間の感覚を失い、距離感が掴めなくなる。自制心が失われて幻惑状態がもたらされる。

習慣を断ち切るためにには、最も厳しい方法でなければならない。中毒者は医療施設に入り薬物が徐々に抜けて、マリファナへの誘惑に対して十分に対抗するだけの意志が回復するまで入院生活を送る必要がある。

この恐るべき流行現象は、あらゆる麻薬売買人を徹底的に根絶することでしか止められないだろう。』

ミシシッピ大学医学部薬理学科のロバート・P・ウォルトン博士は、マリファナに関する最も包括的な本を上梓し、そこでは薬理学と社会的研究の二点が書かれている。その中の章「現在の米国におけるマリファナの害悪」は、ニューオーリンズの公共安全委員 F. R. ゴミラ博士と、市委員会の化学者 C. G. ランボーらによって為された。彼らはここで、ニューオーリンズは全米で一番早くからのこのドラッグが広まり定着した地であることに言及し、そのため社会問題として大麻喫煙の広がりについて、市当局が調査を行うこととなったとしている。特に青少年のマリファナ喫煙に関して、調査官らはニューオーリンズにて話を聞いただけに止まらず、実際に多くの少年少女がマリファナを買っている現場について報告している。ある密売人などは、女子高の階段下に商品を隠すほどであった。

調査官はニューオーリンズにおける 44 の学校でマリファナ喫煙が行われていることを明らかにした（その内、高校は数校でしかない）。この調査結果は社会的動搖を生じさせた。

「親、教員、牧師と司祭、福祉局員や女性会から無数の問い合わせを受けることとなった。児童福祉施設は大麻喫煙を行った少年で満員になった。児童局長官は喫煙の影響下にあった子供らの多くの問題を報告しており、二人は『マグル（大麻）』が施設では入手できないため脱走したと語った。別の施設責任者は喫煙の影響下で犯した微罪について、少年らの父親から無数の嘆願書を受け取った。

これらヒステリー状態にある少年らと、そのよく知られた『バカ笑い』を観察し、調査監督者はこれが容易ならざる事態であると判断した。当時の噂によると音楽施設では黒人も白人も子供たちの多くはマリファナの影響下にあったという。マリファナ煙草はまるでサンドイッチと同じように持ち込まれ、値段は二本で25セントばかりであった。子供たちは購入のためにペニー銅貨を持ち寄り、グループに分かれて煙草を回し吸いしたわけだ。一息ずつ決められた回数を楽しみ、そして次に回していく。

この調査の結果150名以上が検挙されることとなった。約100の地下営業所、ジュース販売店やナイトクラブ、食料品店や個人宅などが家宅捜索を受けた。中毒者、犯罪者、ギャング、多国籍からなる娼婦、密売者、少年少女など、豪勢な身なりのものから労働着姿のものまで全員が、取締隊の摘発によって一網打尽とされた。

警察の徹底的な検挙にもかかわらず、以前から確立されてきたこの悪徳を完全撲滅するにはたったの一撃では十分でなかった。この数年後、ニューオーリンズは明らかにこのドラッグの影響を受けて悪化した犯罪の大波に直面した。銀行警備員は二倍に増えたものの、当市における最悪の強盗事件を防止できなかった。

『マグル・ヘッド』として知られる不良らは、麻薬で気を大きくして警察、銀行員、野次馬を射殺した。当時の州検察官はニューオーリンズなど南部では、ドラッグによって怖いもの知らずとなった犯罪者が暴れまわっていると宣言した。検察医は450名の収監者を調査し、そのうち125名がマリファナ喫煙者であったことを確認した。また麻薬取締官はニューオーリンズでの犯罪における60%に、マリファナが関連していると述べた。」

本諮問委員会は、調査エリアを限定することとした。マンハッタン区は幾つかの理由によって、ニューヨーク市において最も調査の有益性が高い地区である。本プロジェクトを具体化するために、私たちは以下の質問に対して答えるよう努めることとする。

1. マリファナ喫煙はどの程度広まっているのか
2. 末端の売買・販売手法はどうなっているのか
3. マリファナ喫煙者の一般的な、社会と薬物に対する態度はどのようなものか
4. マリファナと性的衝動との関係は何か
5. マリファナと犯罪との関係は何か

6. マリファナと少年非行との関係は何か

私たちの調査においては、今現在マリファナ喫煙者でありその効果をよく知るものや、喫煙者ではないが居住地や職業上の理由によって当該テーマについて知見を持つ人々への広範な質的調査を行うこととした。

調査スタッフの構成

1939年10月、警察における調査委員会がL. J. バレンタインを調査班長として立ち上げられた。この調査班には3名の専門委員と警察における麻薬摘発に関わる探偵1名の協力を得た。警察チームは高等教育を受けた、調査に最適のバックグラウンドを持つ若い警察官をリストアップした。そのリストから6名の警察官が選ばれ、女性2名と男性4名でその内1名は黒人とされた（訳者：原文では、警察官や委員の名前が一人ずつ記載されているが長大になるため省略）。これらの警察官は、マリファナ調査という主題を十分に理解するための事前教育を受け、現場で場違いにならないように彼ら自身の振る舞いに留意できるよう訓練された。彼らはマリファナの匂いをかぎ分けるエキスパートとなり、社交場における喫煙を即座に判別できるようになった。

本調査の監督者によって定期課題が作成された。各調査員は調査課題のインターバル期間に、本委員会の速記者に対してそれまでの活動と知見の全般的報告を行った。監督者のオフィスでは頻繁にミーティングが行われ、そこで各個人から上げられた報告についての議論と評価がなされた。

「マリファナ調査隊」として彼らの任務向上を期するために心理学的アプローチも実践された。他の警察官に彼らの任務を話すことや、現場で逮捕を行うことは認められなかった。この取り決めは彼らがあらゆる側面において警察官として認知されることなく、あくまでも調査官として効果的な役割を果たすために重要なものであった。彼らは警察官でありながら、日常的に法違反者らとコンタクトすることとなったのであるが、彼らの直属の上司は「マリファナ調査隊」としての調査報告を監督者に話すことを許可するなど、委員会への全面的な協力を得ることができた。

調査隊はこの任務の間、マリファナ喫煙や売買が考えられる界隈で実際に「住んで」いた。彼らは頻繁にビリヤード場、バー、グリル、安いダンスホールや、彼ら自身のパートナーを連れて別のダンスホールへいき、また劇場観衆の中から舞台裏、ローラースケート場、地下鉄、公衆トイレ、公園や波止場などでその場に馴染み、通りで偶然の出会いを待ち受けたり、学校や地下鉄、バスターミナルを徘徊したりした。また彼らは町の外からやってきた「カモ」を装ったり、高校や大学の学生を演じてみたりもした。

私たちは、これら調査官らの素晴らしいパフォーマンスを高く評価するものである。そして

警察が構成した調査委員会の面々についても、その協力を特筆し感謝の意を表する。私たちはもちろん迷惑をかけたであろうが、常に温かい応援と協力を彼ら全員から得ることができた。

〈販売手法〉

一般的にマリファナは煙草のように用いられる。時折噛み煙草のようにして類似の効果を得ているようなものも散見される。この煙草の一般的な呼称は、マグル、インド大麻、ウイード、ティー、ゲージやスティックといったものである。マリファナ煙草は普通の煙草と違い、サイズは様々で長短や太さに差異がある。

価格はそのマリファナ煙草に含まれている効能への世評によって変わり、それは生産地によるところが大きい。最も安価なブランドとして知られる「サスフラス」(sass-fras) は、3本で 50 セント程度。これは米国原産のマリファナを巻いたものである。

喫煙者らはこうしたマリファナは大したことないと見なす。俗にいう「ハイになる」ためには、安価なブランドを何本も消費する必要があると彼らは考えている。マンハッタン区在住の喫煙者らの見解は、行政当局者が主張している米国内のマリファナも海外産と同様の強さがあるとする見解とは若干異なっている。

「メズロール」(meserole) と呼ばれる「細巻き」煙草は、「サスフラス」より少しばかり上等だと思われていて、一本で 25 セントの値が付けられる。この「細巻き」も中部や南部の米国産である。

「ガンジョン」(Gungeon) は喫煙者から最高品と評されるマリファナである。これは煙草一本分にして 1 ドルに相当する。これを一発吸えば、「サスフラス」や「細巻き」よりも早くハイになる。「ガンジョン」はアフリカから海を渡って運ばれてきたものだと信じられている。この煙草の売買は大多数の喫煙者らよりも経済力のある上客に限定されている⁽⁴⁾。

普通の煙草常用者がタバコの良し悪しを見分けられるように、マリファナ喫煙者も品質や効能を見分けることができる。外国産の巻紙は、しばしば「これは舶来品である」ことを顧客に信じさせようと、売り手がよくやる手法の一つである。

マリファナ煙草の販路としては二つの経路がある、すなわち独立のプッシャーといわゆる「喫茶室＝ティーパッド」(Tea-pad) である。喫茶室オーナーとの会話やプッシャーらとの議論から得た全般的な観察推計では、ハーレム地区には約 500 軒の喫茶室と、少なくとも 500 名のプッシャーがいる。

喫茶室は喫煙者が集まるアパート部屋である。こうした場所の大半はハーレム地区内にある。私たちの印象では喫茶室を貸し出している家主、代理人、管理人らは、その目的を実際のところ知っているように思われる。部屋は顧客の求めるような家具付きで貸し出され、普通喫茶室には快適なヴィクトリア風の家具やラジオが備え付けられ、ほとんどニッケルオデオン

のようだ。照明は薄暗く青みがかったり。お香も演出の一部として欠かせない。壁にはしばしばヌード絵画がかけられて、セクシーな演出がなされている。これらの装飾は、喫煙のために来た客にとって必要な環境／セッティングだとみなされている⁽⁵⁾。

喫茶室はそれぞれ、マリファナ売買に関して独自の制限を設けている。いくつかの場所では、マリファナとウイスキーが売られ、別の場所では性的サービスも行われている。ある場所では性風俗のみが供され、別の場所ではマリファナとウイスキー、そして阿片を買うことすらできる。

喫煙者らは、他人と一緒に喫煙することにより大きな満足感を得ている。喫茶室利用者らの態度はリラックスしており、日々の倦みと不安から自由である。それはまるで気の置けない社交場のようなものだ。

喫煙者らはいつでも見知らぬ人と話をする姿勢でいて、マリファナの効果に関してや、時には彼ら自身の知的水準からすれば大仰にみえる遠大な人生哲学にまで話は及ぶ。私たちの観察ではマリファナ煙草はいつも回し吸いされていて、話相手との間で常に交換されている。騒々しく暴力的な態度はほぼみられないが、稀にそうした客がやってくると彼は強制退店させられるか、優しく扱われるなら単に静かにさせられる。

これは商売の観点からは正当なやり方ではなかったのだが、大変面白い造りの喫茶室がハーレムにあって、これは小さなテントを複数屋上に並べたものだった。客はテントの中でマリファナを燻らせるのである。そして効き始めてくると、美しい自然と星への惜しみない賛辞を送りながら、皆で渾然一体となるのであった。

（流感など）病気の広がりという観点から明記しておかなければならぬのは、「ピックアップ」として知られる喫煙習慣についてであろう。これは確立された習慣で、マリファナ煙草を点火して一口か二口吸ったのちに、次の人にはパスをするものである。この喫煙とパスの繰り返しは参加者全員に一巡か二巡するまで続けられる。

時折、喫茶室のオーナーは他の地域でマリファナを販売しているが、自らの部屋では売っていない場合、客に対してマリファナを提供するプッシャーと知己の場合がある。

マリファナの別の入手法についても指摘することができる。適切な人物の紹介を経てから、然るべき場所は向かえばそこで行商人と会うことができる。これは簡便な方法とは言えないが、実際のところ可能である。例えばバー＆グリルの店や普通のレストランなどで、私たちの調査員はプッシャーとの連絡を確立し、定期的にこれらの場所を巡回しているらしきプッシャーからマリファナを買うことができた。この場合、店のオーナーは行商人や売買については認知していない場合のほうが多いだろう。だから、もし従業員がこうした売買に関与していると知れた場合には、店員は解雇されるものと思われる。

偶にある事例であるが公的な場でのガイドであっても、適切に話しかければ「草」を売っている場所を紹介してくれることもある。この場合、ガイドが双方から金銭を受け取っていると

みなす根拠はない。駅などで働く黒人の荷物持ちであれば、もっと容易くマリファナ売買を紹介してくれる。彼らは事情に精通していて、客とプッシャーを簡単に引き合わせることができる。

私たちの調査員が見聞したところでは、ハーレム地区でのマリファナ喫煙は大変一般的なことであった。おそらく少数ではあるが、（喫茶室以外の）店の従業員が店内や敷地内でマリファナを売っているのではないかと信じるに足るいくつかの出来事もある。ハーレムのダンスホールでは、しばしばトイレやメインホールでも喫煙が行われており、それはジャズ・ミュージシャンだけではなく、そのパトロンたちも同様である。こうした場合、従業員が販売したという明白な証拠を私たちは持っていないし、またオーナーや従業員がマリファナ売買によって利益を得ているとする証拠もない。ここではマリファナ喫煙は決して推奨されていないのだが、誰からも咎められていない。

マンハッタン区においては、マリファナ売買が行われているローカルエリアが二つある。一つはこのハーレム地区であり、もう一つはブロードウェイの東西にあり、42番街からS9番街に広がる地域である。当該地域以外でマリファナ煙草を入手することも可能であろうが、これら二つのエリアと比べればずっと入手は難しいだろう。

〈マリファナ喫煙者の、社会とマリファナに対する心理的態度〉

私たちの調査によると多くの喫煙者は失業者であるか、もしくはパートタイム雇用である⁽⁶⁾。

時折確認できる通り、喫煙者らはそれが違法な行為であることを十分自覚している。他の地区における先行研究とは異なって、彼らは乱暴狼藉を働いたり無法者として振舞ったりはしない。彼らは喫煙に際して自責の念をもっておらず、喫煙が私生活に何らかの支障を与えていたとしてマリファナを責めたりもしない。ミュージシャンを除く普通の常用者らは、喫煙習慣を秘匿しようとすらしていない。こうした態度は、モルヒネやコカイン、ヘロイン常習者と比べた場合、対照的なものである。

マリファナ喫煙者らの共通見解として言われることは、このドラッグはあまり害がなく、時々の使用でも継続的な使用でも、身体や精神に不調を来すことはないということである。

このドラッグに関する喫煙者らの共通のリアクションは、これが人々を「ハイ」にさせるものだということである。ここで「ハイ」という言葉の意味が、厳密に何を意味しているのかは人によって少し異なっている。けれども、概ね合意されていることは、喫煙効果は現在その人がもっているストレスを軽減して楽にしてくれるということである。大麻喫煙が何らかの身体的疾患を引き起こすということもない。

喫煙を長期間継続した人の場合でも、喫煙者は離脱症状やマリファナへの強い欲求を示すこ

となく、自発的に止めることができる。しばらく中断してから、その後に喫煙を再開することもあるだろう。そうでない多くの人々は、時折週に1度か2度ほど、しかも「事情が許せば」喫煙するだけの不定期使用者に止まっている。私たちは何度か、調査員をマリファナ喫煙者と付き合せてみることもした。調査員が何気なく喫煙の話題を持ち出すと、それが誘いとなつて、その後調査員と友人らはマリファナ煙草を手に入れようと目論むのであった。彼らは喫茶室を探し、そしてもし店が閉まっていたならば、彼らの話題はまた元通り日常的な雑談やビリヤードの話となるのであった。ここにおいて、ドラッグを入手できなかつた場合にみられるフラストレーションの兆候はみられない。これは極めて重要な論点であり、マリファナと他の麻薬との対照的な差異を示すものである。同じような状況が、モルヒネやコカイン、ヘロイン常習者において起こった場合、使用者はドラッグへの渴望や衝動に苛まれ、もし長らく手に入れられなければ、身体的・精神的に明らかなフラストレーションを示すものである。このことは、マリファナ喫煙が医学的な意味で真の依存症・禁断症状をもたらさないという推論の証拠とみなしうる。

マリファナ喫煙に親しんだ人は、一日あたり約6本から10本の喫煙を行つてゐる。彼はいわゆる「ハイ」になるために必要な分量に留意しており、一旦十分な量を喫煙したならば、更に「もう一本」と増えるわけではない。

喫煙者は摂取量を良く分かっている。喫煙者は一旦「ハイ」になれば、その後あまりにも「効きすぎる」ことを慎重に回避しようとしている。「効きすぎる」ことは不安や困惑をもたらすのが常なので、期せずしてそうした状態になった場合、喫煙者はすぐに「落ち着く」ための行動を起こす。例えばビールを飲んだり、甘い炭酸飲料を飲んだりするのは効果的な手段である。喫煙者らが主張するところでは、「とにかく何か腹に入れる」こと、そして手早く「吐いてしまうこと」である。さらに冷たいシャワーを浴びれば「落ち着く」ことができる。

喫煙者らはマリファナを吸いながらウイスキーを飲むと、それはマリファナの効果を無くしてしまうことになると強調する。ウイスキーなどの強い酒で酩酊しながら「ハイ」になることはとても難しく、だから彼らはまずウイスキーとマリファナを併用しない。しかしながら、彼らは甘いワインは好んで多く飲み、このようなマイルドで甘い酒であれば、マリファナの効果を邪魔せずにより良い満足感が得られるのだという。ほとんどの喫煙者は大麻を吸うと食欲が昂進すると強く主張している。

私たちは、いくつかの調査研究が主張するような、マリファナ喫煙が他のコカインやモルヒネ、ヘロイン使用への最初のステップだとする説を裏付ける根拠を見つけられなかった。マリファナ喫煙の習慣が、他の依存性のある薬物に結びついている事例は極めて稀なことである。

〈マリファナとエロティシズム〉

通俗的に喧伝されている説では、マリファナ喫煙は性的衝動をもたらすと繰り返し言われてきた。先述した通り、私たちの調査員はマンハッタン地区に数多ある喫茶店を広く調査した。確かにエロティックなポスターが壁面を飾っていることは事実だが、客はそれに夢中になっていたりコメントを寄せたりすることはない。事実、マリファナとエロティシズムの関係を調査するために注意を向けていたある調査員は、そこでポスターを注視しているものは、ただ自分だけだと気づいて気恥ずかしかったと報告している。

喫煙者らとの無数の会話によって、ほんの時折マリファナとエロティシズムの間に何らかの関係があると思わせる事例もあった。私たちの調査員は親密な内輪の会に呼ばれ、そこで幸運にもドアマンの役割を引き受けることができた。

そこでは大いに飲酒が行われ、ダンスはとてもモダンで放埒なジルバ（jitter-bug）であった。こうしたダンスはエロティックな動きを喚起させるものである。調査員は慎重にダンスを踊っている人々を観察し、その結果判明したことは、喫煙者もそうでない人も、同じように足を運んでいるという事実であった。もっとパブリックなダンスホールにおいて、幾人かがマリファナ喫煙の影響下で踊っているのを見た時も、同様の印象をもった。

時によって喫茶室としての役割も有する風俗店を訪問した際も、マリファナはそれ自体としては性的衝動と結びついているわけではなかった。これらの調査から私たちが出した結論は、エロティシズムとマリファナは直接結びついていないというものである。

〈犯罪〉

一番世間に広まっているマリファナ喫煙に関する噂は、喫煙が直接的に犯罪の要因として結びついているとするものである。

私たちは多くの法執行機関の公務員に調査を行い、連邦、州、地方警察それぞれの担当者から談話を聞いて、大麻と犯罪の関係について一般論として言えることを話してもらった。ほとんどの場合、彼らは喫煙の習慣が、大きな犯罪と結びついているとする証拠は特にみられないと率直な感想を述べた。これら官吏らが語るところでは、多くのマリファナ喫煙者らは確かに微罪で逮捕された経験を有するものの、それはマリファナを吸う以前からの話なのであって、犯罪歴と呼べるものは喫煙より先にあった。さらに官吏らは続けて、俗に言うところの「本物の」「プロの」犯罪はマリファナ喫煙者とは関係がないと述べた。そうした職業的犯罪者は、マリファナを吸っている連中のことを犯罪者としては二流だとみなしていて、プロの「でかいヤマ」には入れられないと考えているのである。

1939年10月から40年11月の終わりまでに、警察はマリファナ使用もしくは所持にて167名を逮捕した。ここでの区分は、白人男性が33名、女性4名、肌の白いラティーノ男性が26名、女性2名、黒人男性が83名、女性6名、カラードのラティーノ男性が9名、女性1名であり、西インド人1名、フィリピン人1名、中国人1名がさらに含まれた。年齢別でみると、12%が16歳から20歳の間であり、58%が21歳から30歳、24%が31歳から40歳であり、6%がそれ以上であった。

この期間中、警察当局は約3,000ポンドのマリファナを押収した。

マリファナ使用と売買はニューヨーク市警が目下警戒中の問題である。しかしながら、この任に当たる警察官は限定的であり、麻薬取締局に属する少数の警察官はこの問題を熟知しているが、大部分の警察官は問題に関する知見を根本的に欠いている。

ニューヨーク市におけるマリファナ喫煙と暴力的な犯罪に関しては、一般裁判所の精神鑑定医を務めるW.ブルームバーグ博士による記述がある。以下は『全米医師会雑誌』に掲載されたものである。

「合衆国南部（ニューオーリンズ）において、重大犯罪者らの中にマリファナ依存者がみられる場合は大変多い。マリファナが殺人や暴行などと結びついているとする報道はそこかしこで散発的にみられる。これらの報道は素朴で無批判のものであるから、内容への評価を行うことは難しい。外交政策協会の紀要には、マリファナが直接的に殺人や凶悪な暴行事件などと結びついた十件のリストが、「連邦麻薬局のファイルからランダムに抜き出された」ものとして書かれている。

十名の患者のうち二人目であるJ.O.は、大麻の影響下でどのように友人を殺害し、死体をトランクに入れたのかを自白したとされる。J.O.を当診療所で調べたところによると、彼は精神病的な虚言癖があり、おそらく同性愛者であったが、検査では何らかの薬物使用歴を示す兆候はみられなかった。保護観察局による調査でも、マリファナ使用は検出されなかった。しかしながら、被害に遭った故人はヘロイン中毒者であった。

私たちは5年半の期間を用いて一般裁判所にてマリファナと犯罪に関する調査を実施した。裁判所での資料はニューヨーク郡の居住者に限定されているが、しかし加害者は全米の多くの地域からきており、多くの人種が含まれている。これは大切な論点であり、それというのも英国での調査者が記すところでは、インドではマリファナが現地の人々にヒステリー症状や興奮作用をもたらしたのに、アングロ＝サクソン系の使用者には生じなかったからである⁽⁷⁾。その他にも信頼に足る資料を集めるにはいくつかの困難があり、それは資料が囚人の履歴と自白によって作成されたものであって、ヘロインやモルヒネといった他の薬物を含めた薬物検査を欠いたものであるからだ。

この期間に17,000人の加害者に対して定期的なインタビュー調査を実施し、マリファナ

を明らかに経験した数百名をみつけることができた。彼らを中毒症状に関する臨床的治験や実験調査によって調べてみたところ、明白な中毒症状は観察されず、また主たる犯罪との関連もみられなかった。特に性犯罪や暴行、殺人についてはそうである。弁護人や報道機関による、マリファナ依存が犯罪の原因となるといった誇大な主張は、少なくともこの裁判管区に関する限り、慎重に精査されるべきである。

ニューヨーク郡における大半の麻薬事犯は特別法廷によって審理され、微罪が処理されてから麻薬使用での訴追が行われる。特別法廷においては同じ6年の間に、約75,000件の全犯罪のうち、6,000件が麻薬所持・使用によって有罪とされたものである。

法的にも、地方検事局、警察署のいずれの統計でも、罪状認否や起訴において数種類の麻薬を区別していなかったため、マリファナの使用者数を他の薬物使用者数と区別した統計は存在しない。そのため法違反をしたマリファナ使用者の合計数に関して、推測値を導出するために6,000件をサンプリングするシステムを用いた。

6,000件のうち25%にあたる、1,500の記録を抽出して調査したところ、135名がマリファナによって訴追されていた。この事実から特別法廷でこの6年間に裁かれたマリファナ使用者は、全薬物事犯のうちの9%にあたる540名程度だと推測できる。この135名のサンプルを分析すると、そのうち93名には前科がみられず、8名には薬物の前科のみがある、5名が薬物と他の事件の前歴がみられ、そして29名には薬物ではない犯罪歴があった。このうち、最も多い4回から7回の逮捕経験者においては、マリファナ使用から他の犯罪への移行はみられなかった。

法廷記録にある逮捕および有罪判決から測定できるように、マリファナは一般的に犯罪歴の開始を促すわけではなかったといえる。同様に、特別法廷においては、被告の8%だけが薬物使用の前歴を持ち、3.7%が薬物および微罪を含むものであった。135名のうち大多数においては、マリファナ使用は他の犯罪への移行どころか、他の麻薬類への移行も示していない。マリファナ使用の初犯者が、その後重大犯罪へ向かうのかどうかは、憶測の問題である。これらの知見から、ニューヨーク郡において重大な犯罪者のうち、マリファナ使用者が占める部分は少ないといえる。」

Broomberg, W., "Marihuana: a psychiatric study." J.A.M.A. 113: 4-12, 1939.

〈マリファナと青少年〉

特集記事作家がマリファナ問題をめぐる最大の懸念だと告発するのは、それが全米の青少年に広まっているという論点である⁽⁸⁾。執筆者らはこれが発育上、危急の問題であり少年非行の主な原因となっていると主張する。この点は、ニューヨーク市、特にマンハッタン区におけ

る重要かつ深刻な課題として検討しなければならないだろう。私たちは以下の論点に着目して調査にとりかかった。

1. 生徒が、近隣の密売人からマリファナ煙草を入手したことがあるかどうか観察する。
2. 学校や警察に対して、生徒が大麻喫煙を行っているとの、親からの苦情を調査する。
3. ニューヨーク市の学校校長、副校長、教師らに聞き取りを行う。
4. 他の市行政や民間機関の関連調査を収集する。

学校責任者には内密の調査として、調査員らはマンハッタン区における複数の学校を監視することにした。調査員は特定の学校に数日間連続して張り込みを行い、不審者や徘徊者を観察しつつ、疑わしい状況においては子供たちの後を追跡することさえ厭わなかった。この手順は、場所や張り込みの期間を変えながら繰り返された。時折調査員は、以前に監視を行っていた学校に再度戻って調査を行った。私たちの関心は自然と疑わしいと目され、多くの苦情が発生するような街区にある学校に集中することとなった。無論、私たちは監視の目を逃れて、偶然調査員がいない場合に取引が行われていた可能性がありうることを認めなければならないが、しかし結論をいえば、本調査において組織化されたドラッグ取引が学校周辺の青少年にみられることは全くなかった。

いくつかの学校は、自らの校区近傍に不審人物がいるかどうか目を行き届かせており、これは称賛に値する。調査員が疑わしい学校の調査を行うために近隣を探索していたところ、私たちの調査員は逆に学校の管理者らから「不審者」ではないのかと疑われたのである。

本調査期間において全く別件の任務にあった警察署員は、調査範囲にある学校においてマリファナ取引が行われているのではないかとの情報を掴んだ。これは結果として検挙につながった、その罪状はある少年が同級生に普通の煙草を売ったというものである。

ハーレム地区においては、学校をさぼった時間や帰宅途中の少年少女らがたむろして、煙草や飲酒を行い、少しばかりの性的冒險を行うような場所をいくつか発見した。

一人の調査員がそうした場所に接近する機会を得て、彼はまるでマリファナ煙草を持参してきたような素振りで入場を試みた。すると管理者のマダムは、この場所においてマリファナは一切厳禁であり、例外などないと調査員をきつく叱り飛ばした。

驚くほど多くの青少年が、普通に煙草喫煙を行っていることは特筆すべきである。それらは不法に、街頭で小銭稼ぎをしているものや、「ゆるい」運営を行っている駄菓子屋などで売られたものである。こうした煙草の違法取引が、大麻取引ではないかと誤認されることはある。

学校の管理職に対するインタビュー調査はとても大切であり、その要約を記す意義はある。

学校名と調査対象者の正確な情報は公的文書として記録してある。

1. 主に白人が通う高校。校長によると「本校ではマリファナ問題がみつかったことはなく、噂すら聞いたこともない」。
2. 主に白人が通う高校。校長は当初調査に対して非協力的で、早く切り上げたいようであったが、粘り強く食い下がったところ「本校ではマリファナに関する問題は一切ない」と回答した。
3. 主に白人が通う高校。校長は「本校でマリファナ問題があったことは全くない」と強調した。

（訳者：以下、より長い文面も含めて39件同様の報告が続くため、紙面の都合上省略する。要約すると、いくつかの学校において噂や疑わしい事例がみつかったが、大半の学校では何の問題もなく、ごく少数の事例において、ほぼ確実にマリファナ喫煙を行っている生徒がみられたとするもの。例えば最後の事例がそうであるため、これは紹介する。）

39. 黒人と白人が通う高校。校長は学校においてマリファナ問題はないと回答した。しかしながら、私たちの調査では数人の生徒が学校から離れた地域でマリファナ喫煙を行っていることを目撃したことがあり、この学校はある程度深刻といつていい問題を抱えていることは確かだと思う。この高校は大変荒れていて、生徒の道徳水準は著しく低い。

上述の調査結果から言えることとして、マリファナ喫煙はニューヨーク市における特定の学校で、少数の生徒が行っているかもしれないが、習慣として広範囲に流行しているわけではないと結論づけるのが正当である。マリファナが少年非行を生み出しているかどうかの事実に関するより正確な情報は、ニューヨーク市児童裁判所の記録に当たるべきであろうから、私たちも当該部局の責任者にもインタビューを行った。そして39年以降の児童裁判所記録によると、マリファナは少年非行の拡大にとって重要な要因にはなっていなかった。

〈結論〉

以上の知見により、次の結論が導出された。

1. マリファナはマンハッタン区において広まっているが、他の地域で報告されているほど問題は深刻ではない。
2. 本街区にマリファナが広まりだしたのは、他の地方と比べれば最近である。

3. マリファナの価格は安く、多くの人々が入手可能な範囲である。
4. マリファナ売買と喫煙は、ハーレム地区に集中している。
5. 大半のマリファナ喫煙者は、黒人とラティーノである。
6. 喫煙者らの一致した見解では、マリファナは心地よくさせる十分な効果がある。
7. マリファナ喫煙の習慣は、医学的な意味における中毒症状をもたらしていない。
8. マリファナ売買は、何らかの組織的な営為によってなされてはいない。
9. マリファナはモルヒネ、ヘロインやコカインへと使用者を誘うものではないため、マリファナを吸うように仕向けることで、麻薬市場を拡大させようとする試みも見られない。
10. マリファナは重大犯罪を起こさせる主な原因にはなっていない。
11. 学校に通う青少年らの間で、マリファナは蔓延していない。
12. 少年非行とマリファナ喫煙の習慣は結びついていない。
13. ニューヨーク市においては、世間で言われてきたマリファナの破滅的な悪影響というものは、みられなかった。

〔訳注〕

- (1) Dudley D. Shoenfeld は社会学者ではなく精神医学、狭義には「児童青年精神医学」の専門家である。1883 年生 1971 年没。彼はベルビュー医科大学で学位を取得し、マサチューセッツ総合病院やボストン市立病院などで研修を行った後、ニューヨーク市のマウントサイナイ医科大学やニュースクール大学にて教鞭をとった。彼は社会調査の手法を用いて、青少年の逸脱行動や薬物問題の研究を行った。
- (2) 通俗的名称としての「マリファナ」は、北米において広まった呼称であり、主に乾燥大麻を指す。「ハシシ」はいわゆる大麻樹脂であり、中近東や北アフリカで用いられたものを想起させる。「マリファナ」「インド大麻草」といった呼び名は通称であり、マリファナもヘンプも大麻も、全て植物学的には同じアサ科アサ属のカナビス・サティバだが品種は細かく分類されうる。
- (3) 最も有名なのはシャルル・ボードレールの『人口楽園』である。1844 年頃のパリにおける「ハシシ・クラブ」はボードレールの他、バルザックやヴィクトル・ユーゴー、アレクサンドル・デュマらの文豪が出入りするサークルであった。同時期のフランスにおけるアルジェリア侵略を後景に、一種のオリエンタリズムと共にハシシ喫煙が行われ、『人口楽園』ではハシシは強い依存性や身体的問題を生じさせるものではないが、意志の後退や幻惑に捉えられることもまた示唆された。
- (4) メズロールの呼称は、ほぼ確実に 30 年代前半からハーレム街区で大物の大麻販売者として知られた、ジャズ奏者メズ・メッツロウの名から取られたものであろう (Mezz Mezzrow & Bernard Wolfe, 2016, *Really the Blues*, New York Review Books Classics)。ガンジョンの由来については不明だが、字面は銃とダンジョンの掛詞であり、いわば「洞窟に嵌まり込むように」「ズドンと」効くことを示唆するスラングなのかと想像させられる。
- (5) ニッケルオデオンは、1905 年以後に全米に広まった、5 セントすなわちニッケル硬貨で入場できる初期の映画館である (加藤幹郎, 2006, 『映画館と観客の文化史』中央公論新社)。豪勢かつ華美で、少し陳腐な風体の建物について、現在ではディズニーランドの入り口に備え付けられたレトロ風映画館が、そのイメージを表象するものである。
- (6) もちろん、本調査が実施された 39 年頃の米国、とりわけハーレム街区では未だ大恐慌の余波とい

わゆる「ローズヴェルト不況」により黒人失業率は高く、仕事があったとしても日銭を稼ぐようなものであった。これは当時の年代においては常識のことであるから、執筆者らが大麻と失業者との関連を特に示唆する文章として解釈すべきではない。

- (7) 当時の米国では人種主義的言説が一般論として流布されていたから、現代からすれば荒唐無稽に思われる人種主義が自明の前提とされる大麻関連の報告があることは不思議ではない。
- (8) アンスリンガー長官自身による「リーファー・マッドネス」「若者の暗殺者」言説は、タブロイド紙とパルプフィクションを中心に広く流通していた。これらの言説については山本奈生, 2020, 「1930 年代米国における大麻規制：ジャズ・モラルパニック・人種差別」『佛大社会学』44 号, pp 28-43 に掲出した。

(やまもと なお 現代社会学科)

2020 年 4 月 26 日受理